



創造性をもって挑戦し続ける

発行所
山口県小学校長会
代表者 兼重彰洋
校長会事務局
山口市大手町2-18
☎ 083-925-2919
FAX 083-925-6776
印刷所
大村印刷株式会社



山口県小学校長会 会長 兼 重 彰 洋

一 はじめに

本年度、山口県小学校長会の会長を務めさせていただくことになりました。山口県の教育発展のため、微力ではありますが、会員の皆様のご支援・ご協力をいただきながら、全力でその職責を果たす所存でございます。どうぞよろしく願います。

さて、今年度も新型コロナウイルスの感染拡大の予測が困難な状況が続いています。こうした中、私たち校長は、子どもたちの健康を最優先としながら、よりよい成長をめざして教育活動をどのように進めていくのか、何ができるのかをチーム学校として考え、取り組んでまいりました。

この状況が、短期に改善されることは大変困難であると予測されます。私たち校長は、これまで行ってきた学校経営の在り方を改めて見直すとともに、新しい学校教育の在り方を模索する時期にきていると考えます。先行き不透明

明ではありませんが、決してあきらめず、皆様とともに創造性をもって挑戦し続けていきたいと考えています。

二 学習指導要領の理念の実現

小学校の学習指導要領が本格実施となった昨年度は、年度当初からほとんどの学校が臨時休業の状況でした。学校再開の後も、授業時数の確保と未履修内容の補充指導に、各学校で工夫を凝らしながら取り組まれてきたことと

思います。感染症対策の現状を踏まえた教育活動は、現在も様々な制限があるものの、これからの時代を生きる子どもたちに求められる資質・能力を着実に育むため、今年度がリスタートの年になると考えられます。

「主体的・対話的で深い学び」を視座とした授業改善、「カリキュラム・マネジメント」、「社会に開かれた教育課程」、さらには、「個別最適な学び」と「協働的な学び」等、数多いキーワードについて、校長が改めてそれらが示された背景と自校の現状や課題を照らし合わせながら、攻めの学校経営に取り組んでいくことで、目の前の子どもたちの豊かな成長や次代を生き抜く力の育成につながっていくと確信しています。

三 地域連携教育の一層の充実

「社会に開かれた教育課程」の実現を図るためには、コミュニティ・スクールの仕組みをいかに生かしていくかにかかっています。学校間連携はもとより、学校と家庭、地域、企業、大学等との連携・協働により、子どもたちの郷土への誇りや愛着を育むとともに、豊かな学びや育ちを実現していくため、各学校や中学校区で特色ある取組が展開されています。

昨年度からの新しい生活様式を踏まえた教育活動は、地域の方と児童が交流する機会の減少の要因になっていきます。それでも、「できない」から「どうしたらできるか」、「何のために行うのか」を学校運営協議会が核となり、関係者で知恵を出し合い、推進し続けていくことが、学校、地域の未来へとつながっていきます。

また、学校教育の基本方針を家庭・地域と共有することはもとより、学校教育目標と総合的な学習の時間や各教科等との関連の明確化を通して、学校教育の質を高めながら「学校・地域連携カリキュラム」の改善、やまぐち型地域連携教育の一層の取組充実につなげていきたいものです。

四 ICTの効果的な活用

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に、ICTをどのように活用していくかも今後の課題です。情報の収集や分析、まとめ、データの蓄積、距離に関わりなく情報の発信・受信が可能であるなど、ICT活用の特性や強みをどのように生かしていくかも、校長のリーダーシップにかかっています。自治体によって、活用の仕方や通信環境面で状況が異なると思われますが、一人一台端末は「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現につなげていくための効果的な学習具であると考えます。

活用にあたって、今後も各学校で、様々な課題が生じることも想定されますが、まずはやってみる、走りながら考えることが重要だと思います。各支部の校長会等で、効果的な活用や課題解決に向けた協議、情報交換が繰り返行われていると思います。チーム学校、チーム校長会でよりよい活用方法を研究し続けることが、課題解決につながっていくのではないのでしょうか。

五 おわりに

新しい生活様式を踏まえた学校教育、そして「令和の日本型教育」の実現と、今、学校は教育の大変革の時期を迎えました。今後も各支部と県校長会、また教育委員会と校長会が緊密に連携し、協議や情報共有を通じて、新しい学校の在り方をともに考え、新たな教育改革に一丸となって挑み続けてまいります。



令和 3 年度の 研 究 紹 介

< 研究主題・副主題 >

自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進
～高い志をもって 他者と協働し 新たな価値を生み出す
子どもを育てる開かれた学校経営の展開～

< 校長会関連研究大会 >

- ◆山口県総会並びに春季教育研究大会
5月7日(金) 山口県健康づくりセンター
(新型コロナウイルス感染症予防のため書面開催)
- ◆山口県小学校長会教育研究大会下関大会
10月29日(金) 下関市菊川ふれあい会館
(新型コロナウイルス感染症予防のためオンライン開催)
- ◆中国地区小学校長会教育研究大会広島大会
11月12日(金) 呉信用金庫ホール 他
(新型コロナウイルス感染症予防のため誌上発表)
- ◆全連小石川大会
10月14日(木)、15日(金) 石川県立音楽堂 他
(新型コロナウイルス感染症予防のため誌上発表)

大島支部【健やかな体】

健やかな体を育むカリキュラム

～家庭や地域と連携した、ヘルスポモーション・マネジメント

健やかな体を育むことを、「ヘルスポモーション」の理念に基づいて、生涯にわたって健康で安全な生活を実現すること」ととらえれば、その達成には学校と家庭や地域との連携が不可欠であろう。

多くのスポーツイベントの開催等、地域の健康意識が高い本支部では、その連携による効果が特に大きいものと考えられる。連携を効率的にかつ継続的に進めていくための校長の役割について研究を進めている。

多くのスポーツイベントの開催等、地域の健康意識が高い本支部では、その連携による効果が特に大きいものと考えられる。連携を効率的にかつ継続的に進めていくための校長の役割について研究を進めている。

熊毛支部【自立と共生】

自立し、共に生きる力を育む教育の推進

本支部では、副主題として「福祉教育に視点を当て、共生社会の構築を目指す校長の役割と指導性について」を設定し、研究を進めている。

研究推進に当たっては、「単元計画作成への指導助言」「児童の変容の把握、

課題の共有」「福祉教育の視点からの価値付け」「関係機関との連携」を視点を設定し、福祉教育の充実を図っている。各校の取組を整理し、成果と課題を共有することで、校長の果たすべき役割と指導性を究明していきたい。

柳井支部【豊かな人間性】

豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメント

本支部では、学校を核として、学校・家庭・地域が一体となった心豊かな人づくりに向け、①「豊かな人間性」の育成に向けた学校と家庭・地域との連携・協働体制の充実、②校内の指導体制の充実と人材育成の推進、の二つを

柱として研究を進めている。校長として、学校・家庭・地域の連携・協働体制の強化を図り、豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメントの充実に向け、果たすべき役割と指導性について究明することとした。

周南支部【危機対応】

学校と子どもを取り巻く危機への対応

～子どもの生命・安全を守る適切な対応と体制づくり～

近年、各地で子どもたちが巻き込まれる事件や事故、自然災害等が多発している。学校はその都度、組織や対応等を見直し、改善を重ねてきた。新型コロナウイルス感染症に係る一連の動きは、その一つの例といえる。

本支部では、様々な危機から子どもたちを守る学校の在り方について研究を進めている。各校の事例をもとに、「組織体制の整備」「関係機関との連携」「危機管理意識の向上」に注目し、校長の果たすべき役割を究明したい。

下松支部【リーダー育成】

これからの学校を担うリーダーの育成

～活力ある学校づくりに向けたリーダーの育成と校長の役割～

教職員の年齢構成の不均衡が顕著となっている今日、組織の要として機能するリーダーや、それを統括し、適切に指導できる管理職の存在は不可欠であり、これらの人材を計画的に育成することは喫緊の課題である。

このため本支部では、学校組織体制の整理と強化、地域との協働による支援体制の確立、教職員研修の充実といった視点から、リーダーの育成に係る校長として果たすべき役割と指導性について研究を深めていくこととした。

光支部【組織・運営】

学校経営ビジョンの具現化を図る活力ある組織づくりと運営

「連携と協働で育む」小中一貫教育を推進する組織づくりとその運営を支援する校長の役割について
本支部では、小中一貫教育推進の中
「十五歳の子ども像」を共有、連携協働する組織の在り方を研究している。

- 一 研究の実際
(一) 中学校区を単位とした「次世代型CS」の組織づくり
(二) 教職員主体の研修組織づくり
(三) 九年間の教育計画の策定・充実
「小中一貫・学校地域連携協働カリキュラム」充実に向けた組織づくり
二 校長の役割 具現化・運営に向けたビジョンの策定及び組織づくり

山口支部【経営ビジョン】

中長期的・短期的な目標とそれを具現化する戦略としての学校経営ビジョンの策定と周知の工夫

本支部では、「先見的で創意あふれる学校経営ビジョンの策定と周知」に向けて、研究に取り組んでいる。
初年度は、「先見的で創意あふれる学校経営ビジョン」を「中長期的・短期的な目標とそれを具現化する戦略」

と定義し、各校がその策定と周知に向けて、どのような工夫をしているのかについて、繰り返し協議を重ねてきた。この中で、改めて策定と周知に向けての校長としての役割が明らかになり、研究が深まった。

防府支部【社会との連携・協働】

家庭・地域とともに、九年間の育ちを支える地域連携教育

防府市では、コミュニティ・スクールや地域協育ネットの取組で学校づくりと地域づくりを一体的に推進し、ふるさとを愛する心の醸成において成果が上がつている。活動の充実の一方で教職員や地域住民の学校運営への参画

宇部支部【知性・創造性】

知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント

本支部では、急激に変化する社会に対応した創意ある教育課程の構築を進める校長の指導性を究明するために、
○地域の特色を生かした教育課程
○小中一貫教育における教育課程
○社会に開かれた教育課程

の三つの視点で具体的な取組の整理と成果の共有を行い、校長の役割として
●地域の魅力と子どもの思いをつなぐ
●組織的な推進を担う人材の育成等を挙げた。より具体化し、評価・改善サイクルづくりまで進めたい。

山陽小野田支部【評価・改善】

学校の教育力の向上を図る学校経営の評価・改善

「九年間を見通して、未来を生き抜く子どもを育てるための学校経営の評価・改善」
本支部では、「特色ある学校教育の推進」のために、市内の十二小学校がそれぞれの中学校区での連携した取組を生かし、目標達成に向けて取り組んでいる。本年度は小学校と中学校における九年間を見通して、未来を生き抜

美祿支部【学校安全】

地域ぐるみで命を守る防災教育・安全教育の推進

一 はじめに
本支部では、美祿市の特色を生かし、家庭・地域・関係機関・学校間連携を図りながら、防災教育・安全教育と教職員の研修充実に向け、校長が果たすべき役割について研究を進めている。
二 研究の概要
(一) 関係機関と連携した防災教育
(二) 家庭・地域と連携した安全教育
(三) 教職員の意識向上を図る研修
三 校長の役割
持続可能な取組に向けた検証と改善

萩・阿武支部【社会形成能力】

『社会形成能力』を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方

社会形成能力を育むには、身に付けさせたい力を明確にしたキャリア教育を推進していくことが効果的である。
校長には、児童や学校、地域の実態から身に付けさせたい力を見極め、持続可能な特色ある教育活動を通して社

長門支部【研究・研修】

学校の教育力向上を図る研究・研修の推進

本支部では、長門市教育の特色である地域連携を基盤とした小中一貫教育「みず、学園」を進めている。その人材や仕組みを主に生かしながら、「学び続ける教員」の育成を図るための校長の役割について研究を深めてきた。
主な研究の視点として、
○連携を生かした研修の持ち方の工夫
○一人一人に応じた資質能力の向上
○校内人材育成システムの構築
を設定し、学び続ける教員を育成するマネジメントの在り方に迫っている。

取組紹介

の充実」

小規模校の校内研修

岩国市立錦清流小学校長

河口 龍裕

本校は、複式学級を有する、定数九名の小規模校である。そのため、教職員の一貫が校内研修に反映されやすい。しかし、少人数ゆえに教職員も児童も多様な見方や考え方、対話的な学習、相手意識といった点で課題もある。解決の手だてとして次のことと関連させて研修を推進している。

【校内研修と小中一貫・小小連携】

校内研修は、小中一貫教育の目指す児童生徒像や小中の研修のつながりを意識して推進することが求められる。本中学校区においても課題別の合同研修を実施している。小小連携の合同学習では、主指導を交代して担当することで、他校の教師と互見授業を行う場となっている。また、他校とのオンライン授業を実施することで授業力向上と児童の伝える力を培う一助となっている。

【校内研修とコミスク機能の活用】

コミスクの機能を活用した地域の外部講師、指導助言者の招聘やユニット型の研究協議など、小規模校の校内研修充実には不可欠である。

【校内研修と学校評価】

校内研修の成果検証は、学校評価項目ともリンクさせて評価しつつ推進している。日々の授業の質と研修の成果について内外の目で検証することで研修の質が向上し、地域の核となる学校としての意識も生まれてくると考える。今後も、校長として学校課題を整理して、教職員の良さを地域資源を活用しつつ校内研修を充実させていきたい。

時間と場を工夫した校内研修

田布施町立麻郷小学校長

濱本 満登

本校では校内研修を、授業力向上研修と資質向上研修の二つのくりどとらえ、教職員にとって主体的で学びのある研修を目指している。

授業力向上研修（一人一授業）は、全教職員をA、B二つのブロックに分け、さらにブロック内を二つのユニット（三名程度）に分けて研修を進めていく。指導案検討はユニットで、授業研究はブロックで行い、効率的に研修を進めている。授業後の研究協議では「子どもの学びのスイッチ」に焦点を絞って成果と課題を検討している。

資質向上研修は、人権教育や特別支援教育など、各分野の主任からの説明や校外研修の復伝等を行い、研修の成果を共有している。また、特に夏季休業中を中心に、「一人一講師」という取組も行っている。全教職員が得意分野や自己研修した成果を講師となつて他の教職員に伝えるのである。時間は十分程度と短いのだが、それだけに内容を精選しコンパクトにまとめることが大切になる。誰がどんな講義をするのか期待感も高まる。（因みに私は地域にゆかりのある「国木田独歩」をテーマに取り上げた。）

限られた時間を有効に使って、有意義な研修を進めていきたい。

やる気に火をつける

周南市立福川小学校長

児玉 勉

学校の経営者として優先的に考えているのは、生産性の向上と教職員のモチベーションマネジメントである。ここでは、教員の自律的な学びにつながった一連の動きを紹介する。

一【中学校区合同研修会】

中学校教員からタブレット端末の活用法を学ぶことにより、本校教員は刺激を受け、やる気の火種ができた。

二【他校の校内研修】

本校教員から「他校の校内研修に参加してICTの知識を増やしたい」との相談があった。期待したとおり、核となる教員のやる気につながった。

三【自主研修の場「ハピリバ会」】

本校には、「ハピリバ会」という自主研修の場がある。福（ハッピー）川（リバー）から命名された会は、各自の得意分野に係る指導技術等を学び合う場である。直近の会では、若手教員

が授業におけるタブレット端末の効果的な活用法について講習した。こうした、他の教員のやる気に延焼が始まった。

このように、身近な資源を活用するとともに、誰のやる気も火をつけられれば研修が活性化するかを考えながら、今後の校内研修を充実させていきたい。

ねる・みる・つなぐ

山口市立湯田小学校長

藤井 智寛

校内研修を進めるに当たり、本校での特別な取組と言えるものはないが、改めて整理すると「ねる・みる・つなぐ」を意識していることである。

【ねる（練る）】

「ひたむきに学ぶ子どもの育成」が本年度の研修主題であるが、この主題は、全校職員で児童の長所や短所を分析し、その上で長所が生かされ短所が改善されるよう検討を積み重ねまさに全校で練り上げたものである。

【みる（観る）】

全校授業や一人一授業を行い互いの授業を見合う機会を確保している。さらに、若手教員を中心としたユニットを編成し、互いの授業を観るだけでなく、指導案や授業後の検討も一緒にを行い、多くの授業に触れる機会を増やしている。

【つなぐ（繋ぐ）】

全校授業やその後の検討会の内容を研修主任が研修便りにまとめ、全校授業の改善点や成果を日々の授業改善や次回の全校授業に繋がるように心掛け

各校の

今回のテーマ

「校内研修」

学習する教科の特性、児童への指導・支援の方法等の「学びを深める児童」の具体へとつながると考える。

若手教員が増加した今年度、人材育成も踏まえながらの校内研修の推進となる。研修主任を中心として、教科を絞った研修、積極的な授業公開、専門性を高める講師招聘等、校内研修の活性化に向けた取組は今後も継続するが、主役である児童の姿を常に意識させながら、全校体制で校内研修の充実に努めていきたい。

外国語ミニ研修の充実を

下関市立川中西小学校長

久保 裕幸

本校では、放課後のちよつとした時間や職員会議中のわずかな時間を利用してミニ研修を行っている。

特に今年度力を入れて取り組んでいるのが、外国語のミニ研修である。本年度、本校は英語教育推進教員が配置され、小中高連携英語教育推進校に指定された。研究テーマは、「本物のコミュニケーション活動を通して、英語で自分の考えや気持ちを伝え合う」である。

職員会議の最後に、教職員の声がかき合う。みんな子どもになりきって、「ハロー・・・」「サンキュー・・・」

推進教員のリーダーシップのもと、「笑顔で！」「目を見て！」「大きな声で！」「ジェスチャー」を意識し、コミュニケーションをとっている。教職員が笑顔で対話しており、とてもよい雰囲気だ。実際に自分たちが活動することで、

子どもたちの視線に合わせることできる。

秋には、毎年、中国の上清路小学と交流をしている。英語を使つての交流である。今年もリモートによる交流になるかもしれないが、しっかりと自分の言葉で話させたい。

人権教育を基軸とした、三校の連携による校内研修の推進

萩市立明木小学校長

藏永 啓二

本校の校舎には旭中学校が併設されており、小学生と中学生が同一校舎で学んでいる。また、旭中学校区内には、佐々並小学校もあり、三校間では、これまでも交流学習会や交流体験活動を積極的に行ってきた。

本校が所在する旭地区では、今年度から文部科学省の指定を受けて、学校、家庭、地域が一体となった人権教育の総合的な取組を進めていくこととなった。そこで、本校では、「自他のよさや違いを認め合い、ともに高め合う心豊かな児童生徒の育成」を研究主題とし、小中学校が連携した校内研修を推進していくこととした。研究組織は、小中学校が同一校舎であるという利点を生かし、小学校と中学校の教職員が一緒になって「授業づくり」と「人間関係づくり」の二部会を組織し、子どもたちの九年間の成長を見通しながら、授業改善や学校行事・体験活動の充実に取り組んでいる。また、佐々並小学校においても人権教育を基軸とした校内研修を進めており、学期ごとに三校

合同授業研修会を実施している。

今後も、旭地区が目指す子ども像の実現に向けて、三校が連携した校内研修を推進していきたい。

ICTを活用した授業づくりへの取組

長門市立神田小学校長

重富 哲也

「データを子どもたちに一齐配付するには？」「子どもたちが提出したデータはどこ？」放課後の職員室では、クロームブックを前に、教員のこのようなやり取りが飛び交っている。

本校は全校児童数十七名、完全複式の小規模校である。児童数が少なく、大きな集団での学習や話し合い活動が困難なことから、表現力や思考力が育たないなどの課題を抱えている。

GIGAスクール元年となった今年度、本校ではICT活用を推進しながら、表現力の育成や、主体的な学びにつながる個別最適な学びへの手立てについて研究を進めている。具体的には、小規模校同士によるリモート学習の実施や、間接指導時のICT活用による児童への学習支援、また、個人の学力差により生じる隙間時間の解消などである。ICT活用に取り組んで間もないが、その教育的効果の大きさや可能性、小規模校だからこそそのメリットを強く感じている。

ICT活用を日常化し、これまで積み上げた実践とのベストミックスを図りながら、本校の課題解決に向けて、全教職員で研修に取り組んでいきたい。

ている。

「ねる・みる・つなぐ」の循環により、今後もさらに校内研修を充実させていきたいと考えている。

目指す児童の姿の明確化を柱に

防府市立玉祖小学校長

大谷 圭二

新学習指導要領の全面実施に伴い、本校では、数年前より校内研修において、学校教育を通じて育てたい子どもたちの姿から、主体的・対話的で深い学びに視点をあて、「学びを深める児童」をこれまで以上に意識した授業改善に取り組んできた。

コロナ禍における新しい生活様式の中での授業づくりについて、新しい教育課程の考え方を全教職員が共通認識・共通理解する上で最も重要であると考え、校内研修の中心に据えてきたのが、目指す児童の姿の明確化である。

目指す児童の姿を明確にすることが、児童に身に付けさせたい資質・能力、

支 部 情 報

美 祢 支 部

「ひとが育つ ひとが輝く 教育の美祢」の実現に向けて

美祢市では、「ひとが育つ ひとが輝く 教育の美祢」を基本理念とし、生きる力を高め、将来を担う人づくりを目指して、様々な施策が示されている。

そこで、本校長会では、市の施策を受けて、「学力向上」「ICTの活用による教育力の向上」「小中一貫教育の推進」を三大重点目標とし、各学校の取組を紹介し合い、参考にすることで、市全体の教育の質の向上を図ることとした。方法としては次のとおりである。

【方法】

- ・ 三つの重点目標の達成に向けた取組について、いずれかを選んで紹介する。
- ・ 資料は成功例や失敗例、計画段階や途中経過も可とする。
- ・ 発表は十五分程度で行い、その後意見交流する。

・ 月ごとに当番校を決めて行う。

第一回目は、七月十六日に大嶺小の長安校長から、「日本一学びを楽しむ大嶺小」を目指して、児童自身が学力向上への意欲をもてるようにするため

の組織的・戦略的な取組についての発表があり、よい研修の場となった。

また、美祢支部では、令和四年度の小中一貫教育の本格的実施に向けて、美東町の一中学校、三小学校が他の中学校区に先駆けて準備を進めている。

この夏季休業中には、小中の教員が集まって、目指す児童生徒像や育てたい力を互いに共有し、九年間のカリキュラムの編成や生徒指導体制などを検討する予定である。同時に、学校運営協議会の一本化と、これまで機能してきた各校の地域協働体制の維持と拡大は、校長としての重大な責務であり、四人の校長は、市教委や各校の学校運営協議会長、PTA会長、地域コーディネーター等と協議を重ねている。そして、この動向を校長会で共有し、意見交流することで、美祢市全体の小中一貫教育の推進につなげている。

美祢市の公式キャラクター「ミネドン」です。市内で発見された陸上脊椎動物デイクノドン類の化石がモチーフです。



(美祢市立天田小学校長 池田 洋一)

大好きが溢れる学校へ



長門市立向津具小学校長 塚本 美穂

「算数が難しくなったけど、できるようになったことが嬉しい」、「遊ぼう」と声をかけたら「いいよ」と言ってくれてありがとう」など、子どもたちから素敵な声が届く。これは、養護教諭の発案で始まった「大好き虹プロジェクト」の一環として、学校や地域、家庭の中で見つけた大好きなことを言葉にしたものである。この言葉を七つに分類し、七色で表示することで虹を表現することにした。

「一年間かけて自分の大好きなことをたくさん見つけて、向津具小に七色の虹をかけよう。」と、子どもたちに声をかけながら全校で取り組んでいる。

本校は、山口県の最西北端に位置する全校児童十三名の完全複式の学校である。子どもたちの「大好き」が溢れる学校にするため、自分がかげがえのない価値に目覚め、自分だけではなく周囲の人も大切にすることができる児童の姿を目標に掲げ、様々な教育活動に取り組んでいる。これからも、日々遭遇することがどんな思いがけないことであっても、新しいことを学ぶチャンスととらえ、やわらかい心、そして謙虚な心を忘れず、子どもたちの笑顔を守るために尽力したいと思う。

新校長の声

幸せな学校づくりを目指して



柳井市立柳東小学校長 兼坂 幸雄

「校長先生、柳東小はいいところでしょう。」地域の方の言葉である。子どもたちのすばらしさや教職員ががんばりを熱く語り、家庭や地域の方々の支援や協力に対して感謝の気持ちを伝えたとのことである。

本校は、家庭や地域の方々から惜しみない支援や協力をいただいている。緑輝く芝生の運動場はいつも手入れされ、授業には様々な形で学習支援が入り、休み時間には子どもと地域の方が将棋をして、一緒に遊ぶ様子も見られる。毎月行う学校運営協議会では、学習の充実や安全管理など、教育活動への前向きな意見をいただき、すぐに改善に向けた動きが始まっていく。

このような家庭や地域の方々の支援や励ましが、子どもや教職員の感謝の気持ちと意欲的な取組につながっている。それがまた、家庭や地域の方々の喜びややりがいにつながっていくのだろう。

この好循環をさらに充実したものにしていかなければならない。そうして、子どもや教職員、家庭や地域など学校に関わる全ての人々が、学校や地域に誇りと愛着をもち、やりがいや希望に満ち溢れ、生きる幸せを感じる学校づくりを目指して力を尽くしていきたい。



「人の幸せとは 何ですか。」

私自身、数年間、この答えを求め続ける立場になり、その間、様々な経験をしてこられた数多くの方々との、貴重な出会いがあった。その出会いのたびに、「人の幸せ」について考える機会をいただいた。

その数多くの中で、私自身の心に強く刻まれた出会いがあった。その方は、日本理化学工業(株)会長大山泰弘氏である。ある研修会で大山泰弘氏の御講演を拝聴させていただくことができた。

日本理化学工業は、主にチョークを作る会社で、その社員の七割程度、知的障害者の方が働いている。昭和三十年代前半から障害者雇用を進めてきた日本でも先駆的な取組を実現した会社である。その障害者雇用に取り組み始めた時代、まだまだ障害者に対する理解も進んでおらず、ましてや一企業が、障害者を雇用するということを考えるような時代ではなかった。そのような時代において、大山氏はある僧侶の次の言葉で決心をされた。

「人間の幸せは、物やお金ではありません。人間の究極の幸せは、次の四つです。『人に愛されること』『人にほめられること』『人の役に立つこと』『人から必要とされること』人々が働きたいと願うのは、社会に必要とされて、本当の幸せを求める人間の証なので

す。」

私自身もこの言葉を聞いて、教育の目的を再考することができた。そして「社会的自立」という言葉が自分の中で明らかになった。

急速な社会の変化や自然災害など、先行きが不透明な時代になっている中で、子どもたちが子どもらしく学び、健やかに育つことが困難な時代になってきていると感じている。だからこそ、「子どもたちにとって本当の幸せとは」「今の子どもたちにとっての社会的自立とは」を追い求めなければならぬと思う。大山氏に出会ったあの時を忘れず、あの言葉に立ち返りながら、これからの学校づくりに向き合っていきたい。

そして、本校で長きにわたってスローガンになっている「いのちを大切に 光れ！輝け！浅江っ子」の言葉のように、生涯にわたって、自分の命も他者の命も大切に、光り輝く人生を歩むことができるよう、全ての子どもたちの「社会的自立」を目指して、日々の教育実践を進めていきたい。

全ては人との出会いから

光市立浅江小学校長 和田 明 俊

目 長 耳 飛

子どもは地域を映す鏡

山陽小野田市立厚狭小学校長 久 保 仁



我々大人は誰しも、幼き日に得た原風景や原体験と呼ばれる記憶をもっているもので、私自身も

今なお、忘れ得ない故郷の景色や子ども頃の頃の思い出がある。例えば、もう五十年以上経ったのだろうか。当時の厚狭駅のホームにはお弁当やアイスクリームを売り歩く方がおられた。独特の声の調子を今でもはっきりと覚えてい

このほかにもある原風景、原体験は、私の人生において様々な、かなり重要な場面で、自身の生き方や考え方に大きな影響を与えていたような気がする。厚狭小学校の子どもたちは、今まさに、ここ厚狭の地で原風景を見て、原体験を

得ている。身近な景色として、厚狭川の流れや神社やお寺、町並みといった有形の物だけに限らず、その地域に住んでいる人々や家族との会話や食事といった何気ない生活の営み、ボランティアの見守りの方々や子ども会、スポーツ少年団等での活動に至る様々な事柄が、この時期の子どもたちにとって

は、忘れ得ない記憶として残っていく可能性がある。

今日の多岐にわたる複雑な教育課題を解決するために学校、家庭、地域の連携・協働の必要性が説かれている。思ってもみなかった新型コロナウイルス感染症対応のため大規模なイベント的な行事はほとんど中止することとなったが、厚狭地域には様々な方々の個別の活動がしっかりと根付いている。毎朝校門で登校してくる子どもたちを迎えているが、雨の日も風の日も同行してくださる多くのボランティアの方とはすっかり顔なじみとなった。バイクで最終班についてくださる方もいる。気付かないうちに広い校地内の草刈りをしてくださる方や砂場の砂がいつの間にか、ふかふかに耕されていることもある。毎月のあいさつ運動の日には多くの地域や保護者のご協力で校門周辺の密が少々気になるほどだ。子どもたちの姿は任んでいる地域社会を映す鏡でもある。指導を終えて校長室へ戻ると「朝活」の六年生数名が床を水拭きしてピカピカにしてくれている。

一人一人、今何ができるのか自分で考え、行動する大切さ。子どもたちが大人になったときに、ここ厚狭の地で育ったことを温かい気持ちとともに思い出せるような原風景を彼らの記憶の中に残していきたいと思っている。

◆赤間硯の作者であり、山口県無形文化財でいらっしやる日枝 敏夫さん（雅号・玉峯）。令和元年には旭日双光章を受賞され、芸術家として職人として活躍されています。伝統を引き継ぎ、守り発展させる技と知恵、さらにはこれからの伝統工芸についてお話を伺いました。

※赤間硯への想い

硯は道具です。筆を使って文字を書くための道具であり、墨や紙と違って一生持てる長寿の道具です。だから、直接見て触って形や色の美しさやよく擦れそうかなど感じてもらえたらよいです。そして、目立石で研ぎながら手入れをして大切に使用していただきたいのです。気に入った硯を長く使ってくださいと、それが職人としての生きがいであります。硯は、複雑な形や模様があるものもありますが、単純なものほど難しいのです。のみ一本入れる場所が出来上がりは違ってきます。だから、職人は、道具にこだわり、自分の身体に合わせて自ら道具も作ります。昔はのみも自分で作っていました。この岩滝地区一帯はみな硯に関わる仕事をしていましたから、赤間石を掘り出す人、鍛冶屋の仕事をする人、硯を彫る人、売る人など、分業していた頃もありました。当時は、職人も三十人くらいいました。私の祖父も石をとることを専門としていました。自分が

子どもの頃は学校から帰ったら、山に行って石を背負って帰ったものです。子どもも貴重な労働力でした。しかし、今では職人は三人となりました。私は、石を掘り出すことから仕上げまで全て一人で行いますが、石を掘り出すことができるのは、現在のところ私一人です。この技術を職人の一人である私の長男に伝えていくところでは、硯を彫る技術は私と変わらないとしても、硯に適した石を見分けることは、相当難しいのです。採石できる石層の高さ、角度がありますし、不純物も混じってはいけません。火薬も扱いますが、大切な石が粉々

探訪シリーズ

この人 この歩み
伝統工芸を引き継ぐ職人魂



山口県無形文化財

日枝 敏夫 さん

になつてはいけませんから、「見立て」が重要なのです。また、坑道が崩落しないように柱や石垣を組む技術も必要です。これらは、誰も教えてくれませんが、私が二十六歳の時父親が亡くなり、それからずっと一人で赤間硯を作ってきました。周りの職人がすることを見て、自分で試すしかありませんでした。

職人がしていること、話してくれたことは、努めて覚えておくようにしました。

※伝統を次の世代につなげるには

宇部市伝統文化推進事業（以前は生産協同組合主催）により、若い世代に赤間硯のよさを体験してもらっています。職人さんが学校に出向き、指導しながら、小さな硯を子どもが彫って磨いて持って帰っていました。年間三百個くらいは作っていました。今年では、宇部市の単独事業で市内の全小学校の児童が、赤間硯を使った習字を体験しています。また、硯製作のDVDも視聴しています。

※子どもたちへのメッセージ

ものごとは、あきらめないこと、やってみること、挑戦することが大切だと思います。自分がしたいことをやり遂げて欲しいですね。やってみて、やるだけのことをやるのです。途中であきらめずにやってみれば、人に認められるものもです。いずれ自分のためになります。

職人さんのこだわりと熱い魂に触れ、道を究めた方の偉大さと信念を貫く生き方に感動しました。

（宇部市立万倉小学校長 堀 明美）

穏やかで優しい語り口の中に、伝統を引き継ぎ、「本物」を大事にされる熱い心と深い知恵を感じました。

（宇部市立吉部小学校長 江田 良市）

本部だより

新型コロナウイルス感染症の波が幾度となく襲ってくる状況の中、学校では感染拡大防止の取組とともに、地域との連携・協働による日々の教育活動の推進に取り組んでいる。全ての教育活動がこれまでどおり実施できるものではなく、様々な工夫により実施の方向性を探っている状況である。

小学校長会としても同様である。昨年度は、総会は書面開催、秋の中国大会は誌上発表としたところであるが、令和三年度は、兼重彰洋会長のもと、秋の下関大会について、分科会の発表だけでもリモートで開催できないかと調整し、実施に向けた努力をしている。新型コロナウイルス感染症の小学校長会諸事業への影響は大きいですが、どうすれば実施することができると考えながら取り組んでいるところである。

今後、感染症がどのようになるかは分からないが、学校において「どうすることが子どもたちにとって最善か」ということを考えながら取組を練り直し、創り上げていくことが必要となるであろう。

緊急かつ多様なことを求められる今だからこそ、柔軟な対応を行っていくことが、大切なのではないだろうか。私たち小学校長会も同様である。